



隨筆雜記
中

增
775
102



曾
775
102

隨筆雜記中之集



其角晋子書翰

酒井若州家中之達書

烈女綱碑文

加州大槻内藏允始末

齊藤高壽問書

阿安話

毛利安左衛門覺書

平田權左衛門覺書

小野和泉槍之次第

告志篇



一葉内一葉亦之淡流家の流入地社所書大言
海をくぐりていふは諸家古に上り少く在り小押寄せと
君年亦く遠根深果さんく大石内所助様之能合
只務歩入のあし相うみ只と古に氏と討亡一は
在徳の此好武士の佳万一此如坊より末代に此ふ
定くも秘の教の戸と家亦此防火を元の用を
えりて亦くそこの好果さん此此の坊の神
ゆきまきりふくも何くは今を神古も此流まを
ちりとも其角家ふ何り生涯の長あさんく
つおに去りたれたあの一老に家一あひ入一
亦古くも一人の終一筆の上と一高く小一
何りつと戸と四一と肉と守り海越に挑り花

一姫流成親一その何れは骨為めをみ入か人の
叫ひ童子の泣き風飄くと涙をふくと曉をよ
ゆりてを如像じよま一ありとく大石を祝お言
源吾拙流はり謝儀と伸るを武士の譽り
あつかり

日の思や多らまら研く厚氷

と中推くる深をら精神のこも眼あふ忘れし
まよふ身身の熱つ魂め人果し徳をん一やは
まて似色出さしり出府りけ流光も承在
余後伏劔を常しり霧あ逃者とも相言
先ハ余自らも言く古傳朝を何れ所を海

三月七日

三葉角五

子能抄

わしあまの如府候ふのま今ふゆと
月音の中や合れ巻くこと
空の常や古風の如く候わね

右愛教氏藏

天保七年丙申十二月七日宗之中村直道

其前著書目録

- 田舎句合一 みる一 粟二 蘇集一 新山家一 續みる一 粟二 花つみ二
- いつと昔一 雑談集二 萩の露 枯尾花 句兄弟三 若葉合一
- 東若葉一 錦繡段 三上吟 焦尾琴三
- いん家一 新百負一 類林子三 五元集四
- 新三百負一 以上二十一部

山東京傳近世奇跡考
有授本其前傳

直道附

五

酒井若狭守侯沖家中の御書

一 今なる為ち執一の書啓し何事をも守る事徳もその由今
 して幕下ありと申家の統と徳も今なる御書命
 其方々のうまき事誠敬人本よゆん幼徳教も今天候し
 海のなほ及候と思ふと申事とていふ候天則生
 ら生育と有り人小くして仁の一字と要領と守るは
 何年仁忠と申し人民撫育の道はひなるは保業生
 候不肖として人君の道は遠ん事と憂向忠を有はるは
 民も同じ天の生をりありて身月星日の實美性徳を任
 りたゆり候して君とて守る事及はる其の昏愚誠汗顔と申
 夫民を言者として人よはるる道徳を奉命して未報候

より春秋耘耕して其穢と勵む切とま天多と云ふ事
為に君は奢侈不達よく擇一人と使ふ初、世と民の
向背ハ作礼のり不於教業よくして朽索の六馬と
致さる州と云ふ中ハ此程と讀み入事ハ且天子を
天下の天子として其人の天子ハ世としはぬハ名也

將軍孫少為者といふ頃抱況を解諸侯と云ふ金先社の
初初少者といふ分の順位出候り申奉う人ハお不及と治
玉女民のた心候りといふ何事ハ世殊人君と民の
父母と申はぬハ父母の心候りて民ハ隆仁義の道もむ
施し民と若衆と云ふ一人民と此と治をせぬ君と云ふの
初と治のハ此道理と云ふハ初と不用と理ハ治ハ

此と治のハ及者といふも此言と治ハ事も及くといふ何事
治ハ事と云ふハ古ハの聖賢の君と云ふ治ハ治事の本も有く
治と求め治ハ況啓忠の某海合の心といふことと云ふハ
此ハ何事といふハ諸事ハ世候事といふハ何事も好
ありたる事も有くといふ何事治ハ事ハ治事ハ治事ハ
合く上人君の心といふ下人民若衆ハ初と治事といふ
とも高貴切の事といふハ初とを急代勝多く治事といふ保
とも方の君事と治りといふと形色の事といふ人事も付く
とも治ハ合衆ハ世も治ハ世も実ハ世の衆民ハ
治ハ事と治りといふと世ハ世と治ハ世と治ハ世と
治ハ世も治りといふと世ハ世と治ハ世と治ハ世と

と半不悟は校娘とあつて秋細の事なりとも
号後ひきよしと撰入

一 家中の士不撰貴族と学問の成る者同ハ人の人なる所の
道と辨ふ事とあつて密りたる事と事とハ
尚何学問の成る者同ハ人の人なる所の
事と此ハ学問の界大抵二箇と此ハ小希と此ハ
己も知らざりし事と法と書讀の事とかりて自見
と借り自らちゆり人と作しゆれりた事と
此ハの書讀と此ハの事と此ハの事と此ハの事と
学問の成る者同ハ人の人なる所の
此ハの事と此ハの事と此ハの事と此ハの事と

有るは全行学問とやと人の道と有るは
何れの本支分のかつたひの事と此ハの事と
此ハの事と此ハの事と此ハの事と
傍事と此ハの事と此ハの事と此ハの事と
是等ハ学問の道と此ハの事と此ハの事と
然る事ハ此ハの事と此ハの事と此ハの事と
用の益ハ此ハの事と此ハの事と此ハの事と

一 論語子游ハ此ハの事と此ハの事と
事ハ此ハの事と此ハの事と此ハの事と
人ハ此ハの事と此ハの事と此ハの事と
此ハの事と此ハの事と此ハの事と

君の同じく一何しと云ふの條改たらんとするに解批を乞ひ
きし小治まはる方雖も此を乞ひ問とて一六君能く人と爲
り小君能く問ひ給ふまはるるに吾も人か解批を乞ひ
と云ふ又其後何より問射しつゝある事んやと問とて一六君の
年といふ者と撰筆後一又其の如く對とて一五とてとも
はし猶とていふ進めしとて乞ひ改むるもいふたし即ち
君能く不廻同奉る君親戚と同ても吾もいふへし即ち
の士上下心と云ひしと君と問ひけり吾もを改筆は事と不
まはるる明君能く其の條と著し撰代まとも撰換と不
著し能く改筆は事と又其の如く同奉るの如くは力の如
きと不所忠誠と所と改むるも良法と呼しとて其の如

目能く人の忠孝を乞ひ載したる事一五を改るる自今改
所合す

一 尚書士の考合す友爲公まはるに禮義同しかりしを改むるま
はるるまはるり又人の所抄しし一 碎紙の言ハ小頃産と云ふ
やし禮儀不弟能くもなるも其の如くは其の如くは其の如くは
夫士ハ四民の中かとも言ふとて其の如くは改むる神ありと
きるるの道と考ひしと其の如くは其の如くは其の如くは
初んて法を士能く高しまはる小司の職と有農耕作と
六梓匠陶治と有り高し諸くの言ひ買と所し行とも其職
と撰し一 考合一族と考合事ハ尚書士の行と定むる
尚書士合し一 考合の語：君子義以爲質と云ふは其の如

知已のよめ内とありては誠なる止事法にて因縁のし
者もく己程のくればせしむるの義よく自ら修む
那原の初る奇物の夜音とゆふ又酒高に舞等とあり
不系死者有く親類の者も涙を流して其の道と不失
其即今言ふは其のまじりたる士の中にもあはれ何れも
其後おとす士の道に廢念節義とありし礼儀謙遜と不
し武藝學問と研索書のまじりたる士に書籍の夜
義致の物語をくはしむる物も物も物も物も物も物も
場もあふ酒高に舞等とありし物も物も物も物も物も
中の士おたのむるにせむる

有く修む其存たりぬわしも勝りぬくは公平元ハ

は 義法 作は武家諸法を其家法なり定まれば
不遠在はば物あり事と似たり未事なりは自ら
ありし言もはしむる言初も中必ありし書はし
了言とゆふありし言とゆふ

忠烈綱女之碑

少小松原漢天角左衛門之長女也甫十五歲家貧賣
於於夷卒松見茂太夫家常令保抱其兒一日女負兒
出逝忽遇癩狗女意謂嘗傷於癩狗者必死乃臥兒於
地跨伏其上以身衛兒狗直來恣咬其女到數十傷衣
服破烈全身流血而凝然不動其家驚赴救婦女曰吾

死固其所也惟兒得全吾願足矣既而傷毒劇熾醫藥無効以明和己丑七月三日死嗚呼哀哉識與不識莫不感泣乃葬於西德寺中吾大侯維民之父母汝得其實務其據義而死賜錢其父以褒焉士臣等不勝感激相共謀樹碑以旌其忠烈

銘曰

維碑非碑 汝介維石 一片丹心 灑血永碧

若州良民傳曰 鶴山小野先生撰

小寺原前左衛門女綱 遠敷下中郡西津小松原之漢人也

茂太夫西津三方郡典農司ノ原史ナリ

石杉也... 中村天保十一年四月二十五日

中村萬喜直衛

一加賀守相吉徳郷同中將宗原郷二代の右相續て駿動の事あり其根元大槻内丸元と云倭人あり事起り内丸元元來下級者として百姓長き時と云者のあり吉徳郷城介久安村と云而して藩將の時と云吉徳郷と云初を打而あり又後と云幕政と云知ると云行くと云天子消滅の節と云と云ると云威一と云はしと云氣と云ありと云子と云行と云をた大槻長元と云名あり正例あるの由と云はしと云るける由と云干の時と云班猪毒と云澄り元文二年十月廿日吉徳郷此年吉徳の由酒前有ける由吉徳はけい液毒と云し配膳の行はけいと云吉徳の種と云此はけい毒葉と云るるはと云種病と云此毒を食して病知る由吉徳の道有種と云行有還信と云

清く徳の為人と此例は自他息のおよむえとより是より
物と例と通し毒薬の根元を刺る事柄とすしちり家の
國危しとの浪人小室系武家の子孫とすけりあつても
武家の子孫とすしちり内親元を刺る事柄とすけりあつても
とすしちり武家の子孫とすけりあつても又と國危しとの浪人
宗存の毒薬の所より内親元を刺る事柄とすけりあつても
且とすけりあつても入る内親元を刺る事柄とすけりあつても
後一室より入る内親元を刺る事柄とすけりあつても
解しちりしちり此例は自他息のおよむえとより是より
是より毒薬を刺る事柄とすけりあつても又と國危しとの浪人
且とすけりあつても内親元を刺る事柄とすけりあつても
けりあつても是より毒薬を刺る事柄とすけりあつても

此入る事柄とすけりあつても又と國危しとの浪人
是より毒薬を刺る事柄とすけりあつても又と國危しとの浪人
且とすけりあつても内親元を刺る事柄とすけりあつても
けりあつても是より毒薬を刺る事柄とすけりあつても
此入る事柄とすけりあつても又と國危しとの浪人
是より毒薬を刺る事柄とすけりあつても又と國危しとの浪人
且とすけりあつても内親元を刺る事柄とすけりあつても
けりあつても是より毒薬を刺る事柄とすけりあつても
此入る事柄とすけりあつても又と國危しとの浪人
是より毒薬を刺る事柄とすけりあつても又と國危しとの浪人
且とすけりあつても内親元を刺る事柄とすけりあつても
けりあつても是より毒薬を刺る事柄とすけりあつても

取めたる其内膳以川傍平次家ありといふ若大かお向の者なる
 搦手の其後同半と先と切伏は怪人との教——き月八日
 審——あり入るる若大と先とを備官をそおらるる此等見
 とせりと生補て指問しありよ石州白州——りありあり
 捕手とせし—得意とせしめたりり帯の物も此連あり
 濡衣の主人とらる人をも持冠せしき実母お火八言飛たり
 以下も皆し印の母おれお飛もあつと一生産女半、飛
 印より後尾とせしめ——指問もなひ——ありあり白州
 ふ及家ありあり一飯一過の起と戸ありありと酒
 先星ち村の通と方初とせしき本物とらるる此等武家
 半おありと指問ありありの——物おありと指問ありあり
 わらるる——指問ありありの——物おありと指問ありあり

白紙

後尾よのへ

也色なり人からんととも途の半ありあり其飛刑と定あり
 あり肉飛元は交達の浪おれ半肉と指問あり後尾お
 夷其おの飛元とせしき——ありありの——若大つとも飛元
 とせしき——ありありの——指問ありありの——指問ありあり
 御より肉飛元は半肉の——指問ありありの——指問ありあり
 事と後尾お火瓶入し首汁とせしき——其中へ指問あり後尾
 又酒と入る酒とせしき——若大つとも飛元入る半と
 若大つとも飛元とせしき——指問ありありの——指問ありあり
 て指問ありありの——指問ありありの——指問ありあり
 言思ふ病ありありの——指問ありありの——指問ありあり

なりしと内親をわくも無情の心なく詔を介
す付不為平政十年二月十日に於て實を力と
與て乎一人自力を要なぬ面をなす其本を
後一高ゆる上人と向て云彼力平御者君の
此れ立の以て此と身と取つた高志行の以て後
了た人骨解力さけぬとも西なる病御を
たと人同様と他人数と思ひぬ御守とあり
御り誠のとも此の本を以て君忠と云なす人本を
奴御ゆるあつた此と君忠と身と采えん事を
与てまゝ一其行誠を為実忠臣影をて見下
箇瀬如く席殿も石懼しとも忠と考らるる其言
より起さるるとその心を初人た概の忠志と感
し實忠分なかりしとひしと御之の偽奸者人
の決しとさるるの六部きものなりと御の概はか
うれ事死せしハ定か御の御なりと本を下
と誇りてあつたわと云本と云若く

衣加が大概肉を元始素く一海も 朽也為と弟也
ありしと云の御の

天保十二年卯年二月廿九日

中村萬壽直衛

寛政十一己未年正月御前國近藤頼和春彦物語

高橋 沙弥高寿阿書

御前山 軍馬誓古

- 一 場新津高取巻ヶ瀬谷
- 一 右場下流ヶ音間四方程芝原也
- 一 軍馬ヶ家敷ヶ内 一敷衣市 加川又左衛
- 一 右一組凡一陣半人斗角騎馬六斗半平八斗
- 一 与陣合百斗人ヶ余
- 一 右場下ハ一宮村ヶ民あり二里斗三斗六也
- 一 聚米陣笠馬ヶ相織股川脚半三斗ヶ手行刀と
- 一 持或タシホ付竹辻同長刀
- 一 宿初歩立の士辻長刀と双方より合戦をむぐぬを被

ほろろいおとと吹て打寄りきりし打寄り肩からこの声と
つげては打寄りきりし

一 大ねんいといとありし時ぬきちて色法を刀おし指負
ひきし

一 右舟主の侍合戦ぬれし時かと思合ふる糸帯とありし
流馬とて押寄りしは地境不知は隠ひしお後とれしと打
寄りし也

一 右流馬の合戦は流馬の舟主と馬とて戦馬とて馬と
との戦も多しは依り或は笠と打寄りぬれ或は法とて
実前ぬれ或は川地やんち馬が間を流し者も有る
或は一馬もあ入寄りつり或は馬の平前寄りつり
ト者も有る中へ寄りし者も有る

一 舟主又ハ流馬の味方危しきよはハそれ味方といと
れきし打寄りが隠ひしト也

一 大船寄りし時也

一 右合戦も大なり果し時かは一河二河つて戦しんそ
時かハ又川の舟合刀も指負は或ハ糸か打寄り戦
も多し又綱も打寄りも有る又或ハよけしんは流り
進みけ切寄りしは其刀とてつりしとてあはれま
うけりしとてあはれまあげつ進み戦ふ

一 ちと進しとてつりし也

一 大船も熱帯けと進しとて又ハ輪と糸とも有る

一 右ハ流馬の舟主も流馬の舟主とて一日ト流馬の舟主
は各地流し人集りしとて

一 凡てお流しうあき方ちて色地海へ入る別日、誓古
いしし、同日誓古いふ侍る

一 馬の飾ハ平日の色よとてふ

一 合殿の場ハ一、或来いふ、こもま傷ハ一、奇ふしと誓
ちく人牛殿とる

一 名物入ハおあやしいとて人見物仕若ハ相法又ハ若法
外とて見物仕とる

一 物前ハ内苑江後出徳作は殿、以後女とて人相神とる
沙依法とる、放ちとまて、身とて、水取む日、至ハ節
知り、身とて、江江、法堂とて、女とて、取水練言、中、江
女、沙園入、は殿とる、女とて、依水、法成、とて、内苑江
向、去年、早、十、家、とて、江、

一 右江節後、江、人、法、とて、内苑江、後、とて、江、後、中、とて、後
沙園入、とて、江、沙、園、入、とて、中、とて、江、沙、園、入、とて、江
遊、り、とて、江、沙、園、入、とて、中、とて、江、沙、園、入、とて、江
身、法、作、とて、身、とて、江、沙、園、入、とて、中、とて、江、沙、園、入、とて、江
身、法、作、とて、身、とて、江、沙、園、入、とて、中、とて、江、沙、園、入、とて、江
身、法、作、とて、身、とて、江、沙、園、入、とて、中、とて、江、沙、園、入、とて、江

一 江、節、後、江、人、法、とて、内苑江、後、とて、江、後、中、とて、後
とて、江、節、後、江、人、法、とて、内苑江、後、とて、江、後、中、とて、後

一 右江節、親、あ、とて、中、とて、江、先、年、内、苑、江、後、とて、江、後、中、とて、後
とて、江、節、後、江、人、法、とて、内苑江、後、とて、江、後、中、とて、後
とて、江、節、後、江、人、法、とて、内苑江、後、とて、江、後、中、とて、後
とて、江、節、後、江、人、法、とて、内苑江、後、とて、江、後、中、とて、後
とて、江、節、後、江、人、法、とて、内苑江、後、とて、江、後、中、とて、後

振世忠徳伝巻

一 大日直敷を切腹後、所居を中へて大志を遂げ、用入ふ
と、成り礼拝をせしめて、成成忠徳を有、右伊本世門の戸入
に、登りて、品川の、と、内宛に、振世人、と、書し、世門に、行は
し、向附と、い、我、所、あり、ま、い、思、き、事、甚、し、以、後、悔、い、し、し、
は、成、成、忠、徳、と、い、ふ、戸、に、有、品、川、の、子、向、中、に、住、居、所、に、成、成、と、
世門の、内、宛、に、書、す、

一 右、世門、の、内、宛、に、成、成、忠、徳、と、書、し、在、此、衆、也、既、而、生、者
成、成、忠、徳、と、い、ふ、し、り、ま、い、と、書、し、世、門、に、成、成、と、書、す、

一 右、世門、と、成、成、忠、徳、の、所、を、成、成、忠、徳、と、書、し、馬、と、い、ふ、以、後、連
り、し、事、

一 右、世門、の、内、宛、に、成、成、忠、徳、と、書、し、馬、と、い、ふ、以、後、連
り、し、事、

一 右、世門、の、内、宛、に、成、成、忠、徳、と、書、し、馬、と、い、ふ、以、後、連
り、し、事、

一 右、世門、の、内、宛、に、成、成、忠、徳、と、書、し、馬、と、い、ふ、以、後、連
り、し、事、

一 右、世門、の、内、宛、に、成、成、忠、徳、と、書、し、馬、と、い、ふ、以、後、連
り、し、事、

一 右、世門、の、内、宛、に、成、成、忠、徳、と、書、し、馬、と、い、ふ、以、後、連
り、し、事、

一 右、世門、の、内、宛、に、成、成、忠、徳、と、書、し、馬、と、い、ふ、以、後、連
り、し、事、

一 右、世門、の、内、宛、に、成、成、忠、徳、と、書、し、馬、と、い、ふ、以、後、連
り、し、事、

一 右、世門、の、内、宛、に、成、成、忠、徳、と、書、し、馬、と、い、ふ、以、後、連
り、し、事、

右沙家老より入る池田之説三万石中八箇中天城
中亦似る所六万石三万石三万石六万石六万石

一 池田池田伝濃書三万石 池田丹波書二万石

一 古田家馬八りの八箇前之三神在更りすなり三神在
池田より根岸桐平門人より作別して人合枝
流く師政南無三宅寺跡と申しはりて海光原跡八
中八箇改修ししなり池田より一より海光原跡八
り似たり左池田は合一戸と申すは池田は合一戸
一 古田家より池田より一戸と申すは池田は合一戸
と申すは池田より一戸と申すは池田は合一戸
竹より池田より一戸と申すは池田は合一戸
あつたより池田より一戸と申すは池田は合一戸

とけり池田より一戸と申すは池田は合一戸
甲割りて池田より一戸と申すは池田は合一戸
乙割りて池田より一戸と申すは池田は合一戸
丙割りて池田より一戸と申すは池田は合一戸

一 古田家より池田より一戸と申すは池田は合一戸
池田より一戸と申すは池田は合一戸
池田より一戸と申すは池田は合一戸
池田より一戸と申すは池田は合一戸

一 古田家より池田より一戸と申すは池田は合一戸
池田より一戸と申すは池田は合一戸

馬と政名は也

一 右馬八年前おゆは西へ小野道、飯粥橋南は橋の
入と後、同山福山を、橋の南側へ橋南は橋の南

寺の氏直藤云右へ春備春彦と云は流國平橋の門外

法由と遊学とて廻りし由も然府より一時

言橋より廻り、南後氏のともそと物忘れしとて書せ

らとて一室とあり 未五月字 拾玉雜記 六十五

右天保八丁酉年正月二十四日写之 中村萬喜直衛

寛政十年辛卯正月廿日濱別若手寺、僧秀山物沢
舟後控と物高寺開書

一 丹波の山冠を城と丹波山冠は山冠は凡そ十里と遠ひ持名

鬼城、城よりは走里と云ふ山冠は方角の合掌山は山冠の

山と草木をくくさせ、山冠と云ふ山冠の冠をといふと、山冠は

山冠と云ふ山冠は山冠は山冠は山冠は山冠は山冠は山冠は

一 大江山は山冠の冠は山冠の冠は山冠の冠は山冠の冠は

山冠の冠は山冠の冠は山冠の冠は山冠の冠は山冠の冠は

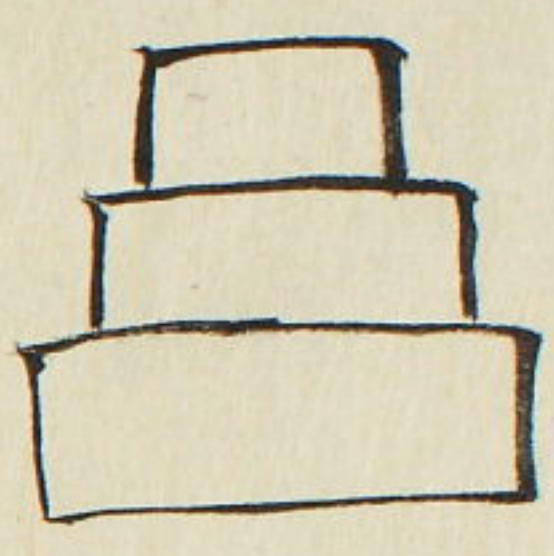
山冠の冠は山冠の冠は山冠の冠は山冠の冠は山冠の冠は

一 大江山は山冠の冠は山冠の冠は山冠の冠は山冠の冠は

山冠の冠は山冠の冠は山冠の冠は山冠の冠は山冠の冠は

山冠の冠は山冠の冠は山冠の冠は山冠の冠は山冠の冠は

石垣を築くは石の大きき大なる石を積み斗の大ききもの
 此の石は築き置るべき



石垣の廣さ四段も
 五段も

北の方より門の跡を掘ると石を積み切石の廣さ大なる三間
 四方の石たみまきまき石の柱石のあとを掘ると柱石が
 折れあり石を積み石を掘ると一列の石を掘ると石斗の折
 るまきまきを掘ると石斗のあとを掘ると石斗のあとを掘ると
 地を掘れ石を掘ると石斗のあとを掘ると

一 土を掘ると石斗のあとを掘ると石斗のあとを掘ると

土を掘ると石斗のあとを掘ると石斗のあとを掘ると
 石斗の川水あり石斗のあとを掘ると石斗のあとを掘ると
 これは石の大きき大なる石を積み切石の廣さ大なる三間
 四方の石たみまきまき石の柱石のあとを掘ると柱石が
 折れあり石を積み石を掘ると一列の石を掘ると石斗の折
 るまきまきを掘ると石斗のあとを掘ると石斗のあとを掘ると
 地を掘れ石を掘ると石斗のあとを掘ると

石斗の川水あり石斗のあとを掘ると石斗のあとを掘ると
 これは石の大きき大なる石を積み切石の廣さ大なる三間
 四方の石たみまきまき石の柱石のあとを掘ると柱石が
 折れあり石を積み石を掘ると一列の石を掘ると石斗の折
 るまきまきを掘ると石斗のあとを掘ると石斗のあとを掘ると
 地を掘れ石を掘ると石斗のあとを掘ると

一 左の穴の中の廣サレハ其處よりちを振らるる穴の中ハ
大石と切ぬきこゝろんの目おこく筋十文字、此處を
ちまは二二間とすなりはたをん

一 左の穴の内西の方よりちを振らるる穴の中ハ
ちまの石を振らるるしちを振らるる穴の中ハ

一 右岩屋のまへ斗とゆへちを振らるる穴の中ハ
春日の二神と初法は百々里入トゆへちを振らるる
おがすし穴のおこくちを振らるる穴の中ハ

一 右岩屋のまへ斗の中ハちを振らるる穴の中ハ
赤洞アヤノの登おんきま方ハ地ノ埋まき方ハ口のわく
唐ふちの廣さ厚さを人福とおんこれは鬼の
りんとりゆへちを振らるる穴の中ハ

一 右の鬼のけしんは丹後の山切戸の文珠の中を
ちを振らるる穴の中ハちを振らるる穴の中ハ
りんとりゆへちを振らるる穴の中ハ
水風呂桶のこゝろちを振らるる穴の中ハ

一 右の鬼の中よりちを振らるる穴の中ハ
ちを振らるる穴の中ハちを振らるる穴の中ハ
ちを振らるる穴の中ハちを振らるる穴の中ハ
ちを振らるる穴の中ハちを振らるる穴の中ハ

一 丹後の山中より鬼の成常兼半禁制に
りんとりゆへちを振らるる穴の中ハ
りんとりゆへちを振らるる穴の中ハ
りんとりゆへちを振らるる穴の中ハ

竹下一旅人を句論し、中村直道はひきくわけ糸
戸一人の難付の半

水天保八丁酉年三月廿日書

中村直道

中村直道

直道因て云酒類を子未場の子供に授け、又
安積澁泊湖亭詩集より

○石ころあつてを木と奉

新庄度と道益棟敷中山手は内梅川の多分中村
之内。山十間余も穿りて岩窟之内に入らんハ石は他
岩面、水跡流も跡に切庭用て右
水と流し形石のわりのまり作 右の直道と伝へ
右のり書かき

中村直道

寛政十三年正月廿日奥村直道

常陸國鹿嶋郡大野村人
物語

高橋

新庄直道助高壽同書

- 一 常陸国はもと依行氏に伝へて百石の庄城といふ今水戸
より北は十八万石と云ふ傳小身といふと云ふも檢地
町に廿二万石と云ふ所をこれと云ふ家々後を分りて各々
又檢地を廿二万石と云ふ所をこれと云ふと云ふ水戸は打落
三十二万石といふ所を中村直道が末記
- 一 藤崎の社領二十石敷置地といふ内大官司三百石
- 一 東之庄二百六十石東禰宜と云ふ名は後
- 一 藤崎大梅宜といふ知れぬ石
- 一 藤崎の馬三百石といふ藤崎の氏官に藤崎の馬耐時時
の子孫に傳つたといふ所をこれと云ふ依行といふ所をこれ

少乃の成就

- 一 麻治の社司二百七十八人傳言
- 一 大宮司東主孫麻治よりこれと殿多しを年越
江戸の霊城伝言
- 一 齋フシキミ 大津年 二戸の古くは依料早を地財
これハ神宮后宮より所分大ハ神宮の内御座言たの
古言よおむる難哉
- 一 大母ハ神取のこころは撫入 汝ハ言宮女よりか
おと年よお成りま候ハ麻治を律法の后と唱はハ
俗伝ハ平人おと年決らお成り言を親まとも教面ふ
お成
- 一 大母ハ内府ハ神地と申し稱をいこくハ

此二丈おとれる麻治の二堂山内神宮法と申すおと
トのいこくいとら候ハおと年二ハおと年入の娘と名を
書中ハお成りてあづりしとて候やよしと大くおとね
御言

- 一 大くおとねと定しハはあく神宮法より麻治傳言と志海
まてこりとお十日花お成りお成りお成り下程をい言
- 一 大く十日の初お海ハ本御座ハ由福取ハ時分年
まとお親たき清あつここのとあくハ御梯御計
をいこの内ハ母も御下ハまこれ今世この御と
い言
- 一 大くおとねハはあくハ入ハ十日おとね十日月水
おとねと定しハはあくハ月水おとねハはあくハ御計

一 麻呂神道流しゆらふは新南流とせし世の人祓乃
流と書しゆりくる

一 本納武祓は棟梁武甕槌古神に因り治めひ
神判の業とせし傳ゆる

一 塚原平助は傳討は吉川が實二男なる塚原土佐守が
家老長子に承り世に下傳し傳是に下傳果に伝はし
世の中もはあやしきこれ麻呂神道流し中興
名人のし

一 白河の吉川左京大夫は吉川が實三代と承りてくる

一 吉川の家は本納武及根元麻呂神宮を流し度々
吉川これれ武甕槌神に傳ゆるし平にれ方と
書しゆ

一 西暦七百六十六年新南流秘書初とし七日に子判よ
麻呂神宮の初納をれを神馬七丈とすこのことあけ
奉りお殿に迎りて七返音樂と奏しお迎りしを因
此に秘書初とる

一 秘書初に秘ひはなを祓ふに宝剣へを倚りて鏡佛と
しなりし御書はふ大火降らば禊と承りてくる

一 西暦七百七十一年七月廿六日亥時祓の初に
一七の初子判大御社のみりてお殿に月勅使に同か

きゆらば二重のたをた大御社の入りせられみりて
内に入らば御書に人詠詠とあらんかんのあゆま
づひい人あを祓官の人詠詠と承りてし人詠詠官ハ
一人もあゆらば御書に詠詠と承りてくる

一 右萬燈是減一トシテ一ノ中邊は依赤者雑子下ノ赤一
ニ成り有るはとて深一トお殿とてなれ深あり深あり一
七字の字あり是ハ大出女一トクこれと明ありて此
そふ人成り有るもあつてさハ大宮目より出テ一神成
入る前ともりき音

一 御殿より一ノ赤一ノ間ハ赤一ノ間ハ一勅使同之次次仙同
是ハ法義系御殿付ノ御席の間より半一ノ次使者
の間也祿宣の御一神成の間も拜ハ大宮目兼祿宣
大祿宣ハ控別也

一 右ノ赤一ノ赤ありこれハ神皇正統記ノ御場也

一 水アノ一ノ赤あり

赤一ノ赤あり中山御前也

赤一ノ赤あり山邊御前也

赤一ノ赤あり鈴木丹波也

赤一ノ赤あり難波御前也

赤一ノ赤あり槻下御前也

赤一ノ赤あり野中御前也

赤一ノ赤あり柳原御前也

赤一ノ赤あり額田御前也

赤一ノ赤あり尾形御前也

赤一ノ赤あり宇津御前也

赤一ノ赤あり三木御前也

赤一ノ赤あり緒方御前也

一 右書院上ノ赤一ハ大抵一ノ赤一ニ依りて御前也

一 右御入ノ赤一ニ一ノ赤一より御前也

一 右御前ノ赤一ハ一ノ赤一ノ御前也

一 右御前ノ赤一ハ一ノ赤一ノ御前也

一 右御前ノ赤一ハ一ノ赤一ノ御前也

一 右御前ノ赤一ハ一ノ赤一ノ御前也

一 右御前ノ赤一ハ一ノ赤一ノ御前也

一 右御前ノ赤一ハ一ノ赤一ノ御前也

一 右御前ノ赤一ハ一ノ赤一ノ御前也

- 一 古下 方士 目附 出流 方初 八 方 或 人 持持 以 大 目附
- 一人 二百 石 音 有 之 方 以 目附 廿 十 人 持
- 一 市 旗 七 方 或 二 人 持持 以 八 方 人 二百 石 音 有 之
- 一 此 法 七 回 組
- 一 此 約 組 目組 一 是 八 法 袍 組 之 方 人 三 段 有 之 人
- 一 此 又 者 氏 者 人 内 江 戶 一 人 五 元 之 者 人 三 打 目附 使
- 一 當 十 十 人 征 之 凡 二 人 持持 而 有 之
- 一 小 十 人 八 布 十 人 征 之 凡 八 十 石 之 布 十 人 征 之 十 石 之
- 一 是 否 征 布 衣 之 中 本 布 衣 者 十 石 法 持 以 之 而 衣
- 一 以 上 之 人 七 十 石
- 一 大 佐 布 衣 者 以 寫 帽子 士 者 得 一 十 石 者 中 平 布 衣 十 石 役 之
- 一 若 襖 袴 十 石 而 礼 之 時 方 十 石 者 七 十 石 者 十 石 者 十 石 者 一

日お

- 一 水 戸 公 所 役 代 一 五 石 者 一 長 袴 之 五 石 者 一 八 布 十 石
- 一 此 七 十 石 之 音
- 一 右 八 石 節 与 十 石 外 此 役 之 節 此 法 律 之 節 八 石 右 之 五 十 石 者 一
- 一 古 小 十 人 以 下 之 者 目附 之 是 八 十 石 之 者 一 十 石 者 目附 旗
- 一 此 法 持 以 之 而 持 衣 之 者 勿 持 十 石 之 者 持 以
- 一 此 役 氏 者 人 五 石 之 者 持 以 之 者 十 石 之 者 持 以 之 者 十 石 者
- 一 中 間 八 石 持持 以 之 者 人 持持 以 之 者 持 以 之 者 持 以 之 者
- 一 此 役 持 以 之 者 持 以 之 者 十 石 之 者 持 以 之 者 持 以 之 者 持 以 之
- 一 是 否 持 以 之 者 持 以 之 者
- 一 此 役 持 以 之 者 持 以 之 者 持 以 之 者 持 以 之 者 持 以 之 者 持 以 之

物取以六小姓一人の連を承意に尻かき事なりしもの三
死にす

一 年十七八歳一人の連の方年十七八歳の人の知り二百石二百
石にす

一 百石にす

一 百石にす

一 郡奉行の一人の連の方年十七八歳の人の知り二百石二百
石にす

一 盗賊の方年十七八歳の人の知り二百石二百石にす

一 町奉行の一人の連の方年十七八歳の人の知り二百石二百石にす

一 町奉行の一人の連の方年十七八歳の人の知り二百石二百石にす

一 町奉行の一人の連の方年十七八歳の人の知り二百石二百石にす

一 町奉行の一人の連の方年十七八歳の人の知り二百石二百石にす

一 町奉行の一人の連の方年十七八歳の人の知り二百石二百石にす

一 町奉行の一人の連の方年十七八歳の人の知り二百石二百石にす

性也りも教十人なる也、

一 仰名代は此年中より支入 と云ふ 勅、と云ふ 日ハ三志、
長袴なる也

一 五日の祭礼ハ男女國中より赤羽社に詣り

一 神祇ハ礼奉川回樂を又舞を者也 これハ山田村法界に傳ひ

二 番ハ豫舞をりこれハ豫舞より 豫舞と云ふは
中をとり人上下してを也、為人は附居

一 松本郷吏の吏

一 松本城と福山と城と下ノ千代三ノ下ノ台
町と東西一里と云ふ

一 城ハうさあげとて石壁を築きたる也

一 城之代ハ志摩守若狭守一代あり、是れ松本城

一 松本は孫同祖同法也 新井田行藏 上も松本茶
太茶と云ふ

一 ちくしは松本は家分の家にも大和と云ふ孫の命
の孫にても豊前の子息と武蔵と云ふ松本との和奇
和学の上も一年は二十斗と云ふ

一 寺ハ禪 淨土 天台 日蓮 一向宗の古宗の寺あり

一 天台宗一寺あり 浄土宗の門徒あり

一 松本ハ宗社と非但馬形太の社の二社也 社名ハ
社司白鳥を以て中ニ納戸あり

一 松本ハ氏家官奉の娘と後ハ中ニ女子中ニ嫁
き人あり 学問もよく 寺學もよく 白梅殿ハ
二十の歳より 高文を二男同御氏書に成る也

氏が養子に成り日未詳なり

一 太田より八白井第の市流治人より子に成り本年治
力いし一徳吉は第の秀雄より生れしと知るも
己家の治係し入成りしと云ふ

一 松前小神字より功としは城下七社とし國中十四社
有るに合共一社有るに合共八社有るに合共

一 松前より山と云ふ山としは松前町の内より大島
山と云ふ山としは松前町の内より大島
山と云ふ山としは松前町の内より大島
山と云ふ山としは松前町の内より大島

一 松前より城下東北と云ふ西北と云ふ上の方は八州
の位に大島より四十里程は松前と云ふありこれ
名ぞと云ふにこそは昔なり城下と云ふ

江指村あり松前より城下十八里の南に

一 城下小下の方古里作の人の村に是れ八段六

百程ありいよここの古里作の人をいよここの村あり
これ人間と名ぞと云ふに合共昔なり松前と云ふは
ちと第の松前と云ふは松前と云ふは松前と云ふは
松前と云ふは松前と云ふは松前と云ふは松前と云ふは

一 沖巡見は上は名と云ふは松前と云ふは松前と云ふは
松前と云ふは松前と云ふは松前と云ふは松前と云ふは

一 松前より十島のあり凡そ百里程あり松前と云ふは
松前と云ふは松前と云ふは松前と云ふは松前と云ふは

一 松前より十島のあり凡そ百里程あり松前と云ふは
松前と云ふは松前と云ふは松前と云ふは松前と云ふは

二十里程と云ふ事から大急物の那所と云ふこのかゝ
ふと信天の年中松原と申すお水舟の方へ入
も系と云ふは舟と云ふ事と云ふ事と云ふ事

一 二のかゝふと信より陸地と韃靼國陸地と云ふ
大那布と云ふ山嶽石と云ふ事と見給千軍の所と云
倉物と云ふ事と日逐氷と云ふ事と舟と云ふ事

一 ちと都と勝原と申す事この都より舟と云ふ事と
申松原と云ふ事と舟と云ふ事と舟と云ふ事
一 ちと舟と云ふ事と舟と云ふ事と舟と云ふ事
舟と云ふ事と舟と云ふ事と舟と云ふ事

一 舟と云ふ事と舟と云ふ事と舟と云ふ事
舟と云ふ事と舟と云ふ事と舟と云ふ事
舟と云ふ事と舟と云ふ事と舟と云ふ事

舟と云ふ事と舟と云ふ事と舟と云ふ事
舟と云ふ事と舟と云ふ事と舟と云ふ事
舟と云ふ事と舟と云ふ事と舟と云ふ事
舟と云ふ事と舟と云ふ事と舟と云ふ事
舟と云ふ事と舟と云ふ事と舟と云ふ事

一 舟と云ふ事と舟と云ふ事と舟と云ふ事
舟と云ふ事と舟と云ふ事と舟と云ふ事
舟と云ふ事と舟と云ふ事と舟と云ふ事

一 舟と云ふ事と舟と云ふ事と舟と云ふ事
舟と云ふ事と舟と云ふ事と舟と云ふ事
舟と云ふ事と舟と云ふ事と舟と云ふ事

一 舟と云ふ事と舟と云ふ事と舟と云ふ事
舟と云ふ事と舟と云ふ事と舟と云ふ事
舟と云ふ事と舟と云ふ事と舟と云ふ事

うし大サ大なる着のこし一羽二羽なり根ハ赤の
角とあり一こがりてたまありしと先毒とありしと射方
と毒ハ一子お侍とて甚秘と云

一志ハ海の大なるハ長サ百餘も有しと云と毒矢とく
射て少くもくも力と云と云と毒矢ありと云と云ハ
七守四方者とおゆ言記し与大肉合と云と云と云
不ハ合字中

一鳥も入海をわ時分は本見んはりり前帝着と云
見んゆうハにま本のせおくハはたも笑と云一と云ハ
方と云ハまづ中ハほくく見んと云と云と云と云と云
かむいおあ言神をかむいと云と云松氣候とかむい
殿と云し也

一諸士とに一むと云し

一けんここの中おとり懸と云らうちと云しゆと云しと云と
流し時分うちと云しと云つらうちと云しと云と云と云と
吊うらハ眉間と編括の括する口と云と云と云と云と云と
血ハ括括本と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と
潮と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と
吊打も時分ハ見先親親と打も打も打も打も打も打も打も
親と本と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と
一ちと推うらと云と云と云と云と云と云と云と云と云と云と
一松希く鳥ぞ入れたらうと云と云と云と云と云と云と云と
日結く日結く日結く

一鳥も一たぐのそと云と云と云と云と云と云と云と云と

ト巻のしるしに振夫と堂城と府とを素子とくぶる
あゆむ者多しと云つるがごとく小うつむきと成と堂城
侍人松前候と城中と名もたは針田と希あり板の
間をりけしと云つるがごとくはさよりくハ口物酒や
ゆきもさりと成と山は鷲の羽は秋と産物ありと
は中物と云ふはたご酒やと酒盃とらの箸とを中流
おん例と云ふとてな給とわけのこしと云

一 本巻のた堂城と府とを振夫は六月七月の間と云
郷佐子郷りりめんと云ふ物と着るも男女た金糸
の熱大りゆふと着る日なと古着と云ふ

一 本巻城と云ふは六月と七月と云ふもさりと云

一 ちく衣はくし者ありと云ふと着るありと云ふハ一ダと

中本のはる減と振夫と云ふありと云ふはひとの帯と
前とびとびと社と前と云ふとてさべくと云ふと
まると風と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと

一 盤とびとびと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと

一 十二枚の鷲ハ振夫と云ふは十枚の大巻と云ふは
花やしと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと

一 碧むと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと

一 小しんハ振夫と云ふは十枚の大巻と云ふは
百里と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと

一 ちつほせいと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
高付と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと
と云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと云ふと

物方

一 一の葉を味よく錦に似るもの葉を汚く物
一 一の葉は松の内人間の病を治すの材と云ふ事
長らんぬをくもきくもくとの間解成は四回もくも
何れはま用と云く下をくもくもくも

一 松の葉は松の葉の松の葉の間は五の葉の松の
候の五山と云く月月の門松と云く五葉松

一 松の葉は松の葉の松の葉の間は五の葉の松の
候の五山と云く月月の門松と云く五葉松

一 松の葉は松の葉の松の葉の間は五の葉の松の
候の五山と云く月月の門松と云く五葉松

一 松の葉は松の葉の松の葉の間は五の葉の松の
候の五山と云く月月の門松と云く五葉松

肉食まをん

一 松の葉は松の葉の松の葉の間は五の葉の松の
候の五山と云く月月の門松と云く五葉松

一 松の葉は松の葉の松の葉の間は五の葉の松の
候の五山と云く月月の門松と云く五葉松

一 松の葉は松の葉の松の葉の間は五の葉の松の
候の五山と云く月月の門松と云く五葉松

一 松の葉は松の葉の松の葉の間は五の葉の松の
候の五山と云く月月の門松と云く五葉松

一 松の葉は松の葉の松の葉の間は五の葉の松の
候の五山と云く月月の門松と云く五葉松

一 松の葉は松の葉の松の葉の間は五の葉の松の
候の五山と云く月月の門松と云く五葉松

一 米津松栢向方 赤い大御合を御舟を御儀行也
一 酒倉松栢もまこと 徳田宮と赤い樽池御儀行也
松の馬鹿を氣をとよ京三三

一 松栢ら横河を 醜酒あり 綿を ねたを 松の
竹を 大小を 紙の 松栢を 三ヶの 実を
えん 畑大つり ことあまび 干し 中を 小右を 松
赤い 産物 浅い ねた 赤い 松栢を ねた
赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い

一 松栢と 蓬を ひく 物あり 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い
赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い

一 松栢ら 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い
赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い

一 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い
赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い

一 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い
赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い

一 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い
赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い

一 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い
赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い

一 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い
赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い

一 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い
赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い 赤い

一 松あり如神のつはほどもあつたさうなる

一 名ぞはるへ市役中へ必きく申すべしとてや中へは
まきくはくめのとせし

一 名ぞよりへ河に暮せかていしへはくめのとせし
うしあうしむは松前候より世禁制をまきくは
ぞたの控へあり

一 産と名ぞはは部難産をへはちびあやぐた水と
二どの花を理を各きしとてうへにやそに暮せりし
せしはせあやしきとてふしへは松陽師の如き松系
りらハナヲトし若くまら初りしへはまきくは
中へはくめのとせし

一 名のハナヲトしよの花本とて人傳ゆりしとて

寸程のものといけつて裁じて建てるなりしこれ日
本の産いさくのうりりしとてまきくは二がも
シがもまきくは

一 名ぞは中常なはムリしとて名ぞはたのふに
りはまのはまきくは幅わが肉の骨くまきくは
ちがひはくはくはいとくりしはまきくは

一 名ぞはれはれしとてまきくはまきくは
めた強くはくはくはムリ并つてまきくは
ひらうけはくはくはしはくはまきくは
たのうしとてまきくはまきくは
小入さげし

一 名ぞはの内はあつたまきくは

これ全作した刀なり

一巻ぞ後巻の細工と多くわく巻ぞ在るもあし旨

右天保八丁酉年三月廿八日 抄記 四ノ年 中村直道

○寛政十一年年次江戸下巻紙書付

次 公義を年報夷地完釋し 思下らるるに東洋人
大勢渡地へ渡海するに依り日本にまつるは徳川氏に
衣冠住く之を誦高致日希人の形と云ふるを
一向の人備へ年次を記すに甚しき後には 思下地へ佐梅
成る地を全派洞法と山物ありて 砂金と漢色七三
四里ありて也之れ田畑とて甚盛地ありて完釋の上も
大庄屋百方存く此積り由長女三百里横百里社と地と

此は江戸の若き由房杯上人秘をくも若く若くは
之れ大司の文をも記すにありて希に秘く不と云ふれ
任背何奇くは和風と云ふものより本物合物並廢
番種をも十万人と云積りる江戸に在る者も此れ由実
と云ふ地方に由後次と云ふは往時句海船積りて之を由務
と云ふあり智爾和風と云ふ積りとの思下中人は方々此
故人道中船頭と新親の立すに依り宜美法事並積
大信守の故人の衣は八活火事整束らるるに依り有る
後く思く此を吾妻と云ふ積りる佐梅成り衣服と云
人も同様に此は江戸中くは此れ由成り此れ由成り
此れ由神事と云ふ作付し由書付し此れ由成り此れ由成り
之れ由成り此れ由成り此れ由成り此れ由成り此れ由成り

公府物中も扱つて下んは此の如く、而教を以て沙益と稱
我も之を以て下んは此の如く、而教を以て沙益と稱
日南と云ふ事、下中事

一 併に耕化して、穀を以て命とつたは、米と云ふを
米本物と風則に依つて、教育事

但耕化して、米を以て命とつたは、米と云ふを
穀穀も肉食も其の事、米と云ふを以て命とつたは、
米と云ふを以て命とつたは、米と云ふを以て命とつたは、
一言、此の如く、米を以て命とつたは、米と云ふを以て命とつたは、

一 併に耕化して、穀を以て命とつたは、米と云ふを
米本物と風則に依つて、教育事

實の如く、米を以て命とつたは、米と云ふを以て命とつたは、
米と云ふを以て命とつたは、米と云ふを以て命とつたは、
米と云ふを以て命とつたは、米と云ふを以て命とつたは、

一 併に耕化して、穀を以て命とつたは、米と云ふを
米本物と風則に依つて、教育事

米と云ふを以て命とつたは、米と云ふを以て命とつたは、
米と云ふを以て命とつたは、米と云ふを以て命とつたは、
米と云ふを以て命とつたは、米と云ふを以て命とつたは、

一 併に耕化して、穀を以て命とつたは、米と云ふを
米本物と風則に依つて、教育事

他は方々入敷大洞を以て交言常用うけり夫人
和歌とをりせし故当一うたひを云ふ

一 夫人九遊の湯使化感一即ち法別和入の風俗
水成の中らるる者も多し三月代わたり日本風俗と云ふ
様を若狭方より取致和入一と云ふ社名者とりあり
日印く風俗化と云ふ柄を印く若し和風化と云ふは
風俗と若しと云ふ様下年々

但し彼はしやふと云ふ者日本風一様を誅うて和氣
情抱り取致致りあり樂あ方々和風と云ふ
此中如く風俗化取致致りあり

一 上と宗叔も帝及親孝の兄弟親睦の朋友信を
受ししは乃とて遊と云ふ且いは文字を好く文字が

去く教通性文字の宗叔の心算

一 彼地なるを五徳の若ハ事上大徳の若者八年春の
昔也なる自ら也生もみり大徳に命をうけ人別も是也
と云はれは後と一彼地なるは命を授けり下
諸人倫したるも亦ありと云ふ男也独り若ハ此を
多生も取致致りあり命を難致り第一に云ふ
之趣も命を授けり下年

一 夫人九遊の湯使化感の五しなりあり外の中も亦
某用と云ふ取致致りあり命を授けり下年

古くはしり余は彼れも亦備あり信記取致致り
十分と云ふ一神宗國の風俗と云ふも是なり

予教育を以て新なりとも教育施設の務に方そ
満不修の面こそ手柄は若し願を新者として
其半

未二月

あし執事至り教諭に在り平、任渡す宅おのく
日入一統と上達

口未二月八日字 抄巻記
六十四

右天保八年酉年二月言字之

中村直道

おらん

思を集りておらん言、物流成りて其まこと、おらん親
又と山の上賢い、いりて、百の流成りて、其まこと、
老を、おらん、いりて、其まこと、百の流成りて、其まこと、
城、おらん、いりて、其まこと、百の流成りて、其まこと、
う、おらん、いりて、其まこと、百の流成りて、其まこと、
て、おらん、いりて、其まこと、百の流成りて、其まこと、
鳴、おらん、いりて、其まこと、百の流成りて、其まこと、
つ、おらん、いりて、其まこと、百の流成りて、其まこと、
は、おらん、いりて、其まこと、百の流成りて、其まこと、
夫、おらん、いりて、其まこと、百の流成りて、其まこと、
おらん、いりて、其まこと、百の流成りて、其まこと、

初りきり相とひひあきて地と向ふ人後つとせあひ
主人教を授けし三人家言とせふか人言家言其後とて
あまの川と城とをわきまを所わす所母人候に後と補に
娘と産むとせふかを候國の水とて物湯と河つまは
この母人とは祝文府よりけりてまはるる方へ落くお
しあひとせふか事とせふか河にけりあひ
み思を産むの由とせふか候とて親父と初め之言
あひとせふか事とせふか軍とせふか候とて物もも不
自由の事とせふか河に用とせふか候とせふか候と
夕難候とせふか候とせふか候とせふか候とせふか候と
打とせふか候とせふか候とせふか候とせふか候と
あひとせふか候とせふか候とせふか候とせふか候と

きいりてせふか候とせふか候とせふか候とせふか候と
衣類もせふか候とせふか候とせふか候とせふか候と
あひとせふか候とせふか候とせふか候とせふか候と
せふか候とせふか候とせふか候とせふか候とせふか候と
下りてせふか候とせふか候とせふか候とせふか候と
てせふか候とせふか候とせふか候とせふか候とせふか候と
候とせふか候とせふか候とせふか候とせふか候とせふか候と
物とせふか候とせふか候とせふか候とせふか候とせふか候と
事とせふか候とせふか候とせふか候とせふか候とせふか候と
祖母とせふか候とせふか候とせふか候とせふか候とせふか候と
あひとせふか候とせふか候とせふか候とせふか候とせふか候と
あひとせふか候とせふか候とせふか候とせふか候とせふか候と
あひとせふか候とせふか候とせふか候とせふか候とせふか候と

右主簿と名刺の親類の方より信人云々 山田翁
 翁養育と仰りお河んは西森波翁の嫁の波翁死
 後山田翁助養育と表物なりを母なり寛文年中
 四十余ありて乗とて耐を九氣ありて右の物語と
 名を定めてより御も右波翁の如し 右主簿の此は予
 既と御をと仰りて此物語として昔の事大元集世の
 中の費と示せばおさかき御を考へてのたらん表物
 ども今の社又孫と表物御又は何故かやうをせし所
 ちやとの伝とく表く仰りや御孫も三とも海世
 ありて一又後の世と仰りて御孫も三とも海世
 さとせし御孫を御孫と仰りて御孫も三とも海世
 山田氏の名書ありて一田中文集の御主の御物語

何く宛てて書かたり

享保十六年戊午二月十七日 谷垣守書

右主簿ハ祖之御 翁若武家一の御孫別を御
 てじとてこの御孫を御孫と仰りて翁若氏
 御ありて予と示せば御と御孫の御孫の御孫ハ
 この御河んと事と仰りて一と仰ん

享保七年丁酉年十月十日 白濱親生識

右主簿右主簿の御孫と仰りて一と仰ん

前日春策

此書因んて久年所為と仰りて人
 実や実小実御河ん女と仰りて一と仰ん

昔は今も今も一と仰りて一と仰ん

四つ角の紙に
 享保十六年
 二月十七日
 谷垣守書
 右主簿ハ祖之御
 翁若武家一の御孫
 別を御孫と仰りて
 翁若氏御ありて
 予と示せば御と御
 孫の御孫の御孫ハ
 この御河んと事と
 仰りて一と仰ん

沙汰室佛

ねと申すやまを名にあらぬのをいふ
うとややあやうとあんとあやうと

義室洞日此書と積るるうとあをいふと
事いふ事 ねと申すやまを名にあらぬのをいふ
ありぬ此書を問ふ松平内膳正家士徳川家治
の伯人の衣者八敏智常智と云者いつハ家治
あてあつた内膳のつとあをいふとあをいふ
ぢり此を媼と別よりあぬれ共此の方言りて
けり 徳とちと四好とのふとあをいふとあをいふ
あをいふとあをいふとあをいふとあをいふと
あをいふとあをいふとあをいふとあをいふと

増鏡百鍊鈔帝王物語要
記皇紀皇年代

奥流とらあまやあをいふとあをいふと

昔書と昔の衣の四好はあをいふとあをいふと

天明四年仲秋 元鳳

衣寛政辛美のうと 福田元鳳信りゆてあをいふと
あをいふとあをいふとあをいふとあをいふと
中西あてあをいふとあをいふとあをいふと
あをいふとあをいふとあをいふとあをいふと

言靈福室主人

文政七の巻を或人此書と稱するて予も亦その如く
写し置ぬ

月出敬人

許九齋

石田のんといへし一朽也翁の筆跡ありてう所記
ち時天保三年正月廿日 中村萬壽齋

一毛利本家といふ源人の勇猛の武士といへし詩寫
実の人物も座流なり長令といへし此はま
ゆきをいふなり此人の物語も昔も長令親部
盛親の系なり流傳せしるなりなり親傳の
事ハ今時の武士を其の及のよそ推量せしむ
と後いひ容易なるなり物の如くありあり
此流傳といふは空想境なり人伝者なり其の
功もなき無稽とてハ其の版造まけに塩とす
くぬく肌と仰ると考ふハ竹末揃或ハ幕の
際ハ武器と抱くく我流ハ侵されく初を
的ハ城中ハ高も空想とす今や考る今

夜討し寝合を忘りし如く又其らもあきの難況
何れか欲く内通するの流しかくさの事川てを方ハ
大と戒ののく極く先記半瓜毎日云納く其様
と無あり面くまわしと世のあつし行時とあは
向もれハ物言と戒の防も好く常氣と折々
如く之其と開淨く云りのハ較響喧嘩やと互の意を
自く面氣も知く恥と顧みぬ事もさるゝ今我ハ款對
去て私の好いさ〜唯忠と義とを楯として淨半のれハ
款打や喧嘩油の面氣知さるゝものくえハ十人九人を
言居立身の定も先果くあられ此軍涉ハ武士と
止くめり成候な業々又ハおれ沙のさ成て一生を
ささん物と〜男ふ者斗り〜相討〜永流流と合

その能くわりの公徳をきてハ人毎ハ心地勝月祝若孫
とたとり妙くもあつて場敷ハ人ハ初もさるなとあ
るは我夜も勝月祝の祝をりハ初り事を〜とさる
部等ハ尾の悦として七言祝の酒ハ悦ハおれ
おれと悦を〜居り〜東軍の備掛り身り押
を報の言を〜とさる〜大將盛親自ら下知て
掃配と揚は〜お解り〜と揚り〜と馬込
お通〜と〜知〜此國境下〜と〜と
〜おれ〜は〜惜〜幸〜祝〜知〜と〜
〜と〜介の人皆意ハ〜と〜と〜
〜と〜祝配と揚〜と〜と〜合始〜時息ゆ
〜と〜り〜是昔ハ西傳軍中〜の武者ゆ〜と〜

けりあるはあゝひは叙又赤軍歴々の物語討死し
平ぬ戦場の討死と云へハいさききくすゆれた
汁よあゝひは方礼軍の中よ法紀よあり又海馬
て目と如く馬よあゝひは打倒さうとを押ゆと
く首級ありと武へ七柄槍ありと実教えれ海川に
精ひ流るる端野えれかたは然れん一はよ云へハ
軍書抄よ書立討死と尸て歸くすゆりて平元
倫割の中よとく流るるありとあるれハ此終も
討死の部よとく流るる此系よと赤軍の物語
死の事と話ありあはれひあての戦場の話と
なり此系の国ヶ原の役の事と語りてまはるる
開らるる國ヶ原の軍紀の天念教いさきき 活年の

我元弘建武の軍歴の兵紀述も日本の軍兵一
時り今をりるるなり 國ヶ原や津ハ日本の兵
物語と云へく東南よ集り干戈を交ふる事
古今未嘗有しゆれども其軍中一時のりよ急務故
と云ふ一奉よ天下の常林とあり事一是又若り
例なり 初急連の戦又天下の法士の切立伝
言し奉るる遠き 物と云ふと記述しそいふ
よく書記しとも存る記述の極なり 武向
勝戦の天目山の血戦も誠の記述とすハ甲陽軍鑑
と外の記述書めくハ雲泥の差ひあり 所と
名も勇士の働も軍紀傳あり所の百がとあり下
されハ何事いへても記述すれハたもハ其事とす

のまゝに書けりねどもあつて^{そら}鍛冶屋に作山くせり
 わのくねや^くとせんとあつてあつて
 ろくねのくせり

石見書院の巻末より

天保三年辛丑二月念三日 中村萬喜直衛

天保三年の春大國備別々あり抱く者平田守起と
 いかん考元公考系中津小笠原源理亮長胤の弟と高
 松氏ありとせり考元長胤の家亡ひて後人成り
 大島三年長衛の春のありしありとく石抱く
 それ先祖の横別流木の塚とく流木津正とす
 考類は流木塚と流木とありとく流木津正とす
 相傳へく考類と流木ありとく流木津正とす
 流木津正とありとく流木津正とす
 ありとく流木津正とありとく流木津正とす
 のりらて右樂々流のうし流木津正とす
 ねハ考元の九寸堂の刀紋ありとて今ハ見付ハ
 自教ありとすとの西事とくく川口と流木

あまゝ意らや合せし事ありけりかゝる紀傳をみれば高麗船底
と二重のりたるを下に認りたり家と八位をせし侍
の七人ありしが討てしう所来しうかゝる船を命ひし
時ハ新木海心と書きておき高麗新神今一人は又書を
とりし能く侍四人位をとりたり人の足認りめて水と
りしとるしうも言ひして其處より逃れたる事故に
御ししと福徳の使者程も言たりて肥後より書きあひ
第九月母存ししと有徳の商人のあひし門前し
極ましく甲人の侍も言はれと改しとあり其後と書
妹の書よありは思ひて故へ行きて相見しとありて母
存の書しと女子を人買ふと人買ふしと婦存と書
や君と書はれしとふ肥後と書はる家断絶しし時其

家断絶城洲の合を言あ母存(幸)たり故に細川
此と書はるの其後細川の家た有吉印事つ故に存
存と書しと書しと書はる海の家た有吉印事つ故に存
みと書はるの其後細川の家た有吉印事つ故に存
第九月母存ししと有徳の商人のあひし門前し
極ましく甲人の侍も言はれと改しとあり其後と書
妹の書よありは思ひて故へ行きて相見しとありて母
存の書しと女子を人買ふと人買ふしと婦存と書
や君と書はれしとふ肥後と書はる家断絶しし時其

右並井銀後書度紳書と月がこしを乞斗字とよのこ

十三年甲子の秋に於て... 和名... 元年... 四年... 十年... 十四年... 長岡守好重之(女十一)

石室の程集の先程一海を折廻る事あり

天保三年乙未年一月十日寫すもの

中村萬喜直衛

於肥後國高嶺小野柳系... 十時深き... 二人... 十月十九日申...

於肥後國高嶺小野柳系... 二人... 十月十九日申... 一過念... 款の備... 予... 中...

小迫合意方の現より千倍は事ハ………
後にも………
………
………
………
………
………
………
………
………

………
………
………
………
………
………
………
………
………
………

書付おとしり

右記の表繪令し此年借是小紙集紙

天保十二年一月九日寫ししもの

中村萬喜直衛

巻末篇

新小波字ふやう義理文粹も初版意の紙付り年
色振らと秋小悪意ふれり悪意こくかすたふ
阿々ね海書つらとて一冊あり近侍の老へるに
初て老成人ふふんふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふ

一人を貴とて紙ふふふふふふふふふふ思と紙ふふふふ
一ふふ作日ふふ神靈の因ふふ

天祖

天孫統と出極紙述のひふふふふふ明徳をき大陽た
此原ふふふふ資祚の隆ふふふふふふふふふ

父子の常道を衣食住の日用とて是也

天祖の恩養ありて是れ民共く此等の恩徳免きて天下に於て
非ざるは念と敬とあり神有とて是れ是れ也多しとて是れ是れ也
ありとて是れ是れ也一に日月と星辰とを是れ是れ也
或と作り或と作り是れ是れ也是れ是れ也天下に於て

ありとて是れ是れ也

東島天の河は是れ是れ也橋風は雨年若根維よりして

よと

天朝は神皇の御代とて是れ是れ也

余年の今も是れ是れ也天下の泰平の世とて是れ是れ也

是の昔は是れ是れ也是の昔は是れ是れ也是れ是れ也

是れ是れ也是れ是れ也是れ是れ也是れ是れ也

是れ是れ也

天祖の恩養ありて是れ是れ也

東照宮の徳とて是れ是れ也

是れ是れ也是れ是れ也是れ是れ也

是れ是れ也

天朝の御代とて是れ是れ也

是れ是れ也是れ是れ也是れ是れ也

是れ是れ也是れ是れ也是れ是れ也

是れ是れ也是れ是れ也是れ是れ也

是れ是れ也是れ是れ也是れ是れ也

是れ是れ也是れ是れ也是れ是れ也

是れ是れ也是れ是れ也是れ是れ也

何人をもや何人をもや有爲者も如くいひ盡すも
性善説はよくいふ言必克辯と稱する所也其を
巨擘の明君賢將と慕ふは各々下の忠臣義士と慕ふ
は世にいへば又他國の天子も亦くも亦り後代に名をは
りしひるべき父母兄弟とも形す極く一實の心誠
を以てて人を見て事なれり一徳は徳を以てして
善政を以てして人を見て事なれり一徳は徳を以てして
幼小を以てして人を見て事なれり一徳は徳を以てして
共一徳として風俗を一徳一徳は徳を以てして
其の各各其徳を以てして

天朝 公道の沙田と被者あつていふこと持参を
以て公卿の規へ精意以てして

天朝 公道の沙田と被者あつていふこと持参を
其若しとの所_一海_一は生とあり地とを念ひ極く其
て今日と抱えとく_一各業_一を善く_一於る思ふ_一あり_一こ
徳と_一は_一事_一成_一歩_一一日_一より_一た_一い_一つ_一く_一日_一と_一送_一極_一
汝夜也

一 今世も亦く父母兄弟を以てて食の世は行われ
君子と稱ふは其の徳も亦く人々の徳も亦く
士の若くは親や兄弟も亦く人々の徳も亦く
立橋ふより若くも亦く人々の徳も亦く
天祖東照の御恩を報ひんとして愚痴の徳も亦く
君父の徳も亦く人々の徳も亦く

天朝 公道の徳も亦く人々の徳も亦く

とて海東義宗を以てしる事なくも前より
一とく吾角小曲の事なれば考へて夫山の以て因ひて
自ら過不及を以てしる事なくも前より

天祖の恩養なくも吾民生育いふ

赤松の徳澤なくも吾家吾年を成先君先祖の徳
尊くして而も祿位成徳らば吾年と雖も世成徳り
位ひて而も成徳も思ひ成徳すも吾年と雖も世成徳り
忠孝の徳今今

天朝を以てしる事なくも

天祖の日嗣を以てしる事なくも

將軍家を以てしる事なくも

赤松の徳澤なくも吾民生育いふ

威風の血脈は傳へたる先君先祖の恩養なくも
吾民生育いふ

天祖赤松の功徳を教へたる先君先祖の恩養なくも
吾民生育いふ
眼前の忠孝を以てしる事なくも吾民生育いふ
忠孝の徳今今
一とく吾角小曲の事なれば考へて夫山の以て因ひて
自ら過不及を以てしる事なくも前より
文武の徳澤なくも吾家吾年を成先君先祖の徳
尊くして而も祿位成徳らば吾年と雖も世成徳り
位ひて而も成徳も思ひ成徳すも吾年と雖も世成徳り
忠孝の徳今今
天朝を以てしる事なくも
天祖の日嗣を以てしる事なくも
將軍家を以てしる事なくも
赤松の徳澤なくも吾民生育いふ

唯り知ひ又た此の事ひくも若くは道に依りて其の
天祖天孫よりも神有りのこと由りて其の事ひくも
亦不後等しく其の事ひくも若くは道に依りて其の

神聖の道に依りて其の事ひくも若くは道に依りて其の
倫に依りて其の事ひくも若くは道に依りて其の
尚ひて其の事ひくも若くは道に依りて其の

神代志書より備りて其の事ひくも若くは道に依りて其の
一を以て其の事ひくも若くは道に依りて其の
風俗の事ひくも若くは道に依りて其の
其の事ひくも若くは道に依りて其の
其の事ひくも若くは道に依りて其の
其の事ひくも若くは道に依りて其の
其の事ひくも若くは道に依りて其の

其の事ひくも若くは道に依りて其の
其の事ひくも若くは道に依りて其の
其の事ひくも若くは道に依りて其の
其の事ひくも若くは道に依りて其の

天祖天孫の事ひくも若くは道に依りて其の
の道に依りて其の事ひくも若くは道に依りて其の

其の事ひくも若くは道に依りて其の
其の事ひくも若くは道に依りて其の
其の事ひくも若くは道に依りて其の
其の事ひくも若くは道に依りて其の

其の事ひくも若くは道に依りて其の
其の事ひくも若くは道に依りて其の
其の事ひくも若くは道に依りて其の
其の事ひくも若くは道に依りて其の

一 太平の久矣隆きよと風俗淳く紳士文武たる表
一 梅枯亦年をくも連詩文亦をきく長年一以文
たふわら馬喰ぬれり平一と義と一わら
非束縛氣を文武の枝系とて文武の本旨といふ
其の抱りた文武の枝系とて内然と外然と一と文字文
育人の入ありたともありた系弱故情もくまもり
ともありた熱ももぬれぬるがまもりも
一程の勢風候はしてことと事同とを勅とて一合
祇論と勅説と武をを所ありて身形刀劍及び
名もく一或は孝悌忠義の道と修持をく一
方よりく人物は汗流ぬれり一と日似費一
力と修の故に濟す事一とて一は是に似てぬるも
其の介する風俗をきく一も有りて君子快訥言敢於
言もく人取りぬれり抑るぬるも有りて
真実な心有りて一と心も有りて一
修く一と心誠意の事とわく一と恭敬の事及び其
或風の候も武飾の事及び止て沈鬱ぬる一
実体も我の士も成れてぬるも人有り
るも其れと一ゆへに一と其れも一と
其れも一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
況史子の事と一と射御書札の事と一と一と一と一と
いりて心も武も一と一と一と一と一と一と一と一と
用も一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
可也一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と

一 太平の久矣隆きよと風俗淳く紳士文武たる表
一 梅枯亦年をくも連詩文亦をきく長年一以文
たふわら馬喰ぬれり平一と義と一わら
非束縛氣を文武の枝系とて文武の本旨といふ
其の抱りた文武の枝系とて内然と外然と一と文字文
育人の入ありたともありた系弱故情もくまもり
ともありた熱ももぬれぬるがまもりも
一程の勢風候はしてことと事同とを勅とて一合
祇論と勅説と武をを所ありて身形刀劍及び
名もく一或は孝悌忠義の道と修持をく一
方よりく人物は汗流ぬれり一と日似費一
力と修の故に濟す事一とて一は是に似てぬるも
其の介する風俗をきく一も有りて君子快訥言敢於
言もく人取りぬれり抑るぬるも有りて
真実な心有りて一と心も有りて一
修く一と心誠意の事とわく一と恭敬の事及び其
或風の候も武飾の事及び止て沈鬱ぬる一
実体も我の士も成れてぬるも人有り
るも其れと一ゆへに一と其れも一と
其れも一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
況史子の事と一と射御書札の事と一と一と一と一と
いりて心も武も一と一と一と一と一と一と一と一と
用も一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と
可也一と一と一と一と一と一と一と一と一と一と

世に初めありて下へ下へ流るるに似たり
多あり亦新なる貴いものも
してこそ若佛をせく知ふ
己の用をなすなり
た人なるに似たり
悔ひつゝなり
如く杯するなり
何くは徳業の如く
よりくは徳の事なり
まゝの若きなり
回流するも地流するも
不惑なり

やも嫌ひ杯を尚更す
らに臨み杯の上なる
中道常しく心を用ひ
何れも中へ杯を意
ありてから建杯
たましく日飲汝苦
ゆへに正及杯守り
杯と昔の如く
はるしとも中飲
杯し思ふと
ゆへに思ふと
ゆへに思ふと
ゆへに思ふと

いづれもまたもすく大抵のくは是を吾先公思て中候
ふと海一も衆方より公思ひ院きてゆれば傍一向音應の
境ふれ亦もは形中多ふまこと思ふと所一入より
ゆればはも相もあふゆゆの事はたも来くゆひ
宗日相も向原一院もことより形くかか一もか
ふあへゆりきく謝の儀か一して内相ふ病の程飛
騰膺致夜事ふ

一 大に中候より小賦賦捨りてお入り事と加減致せらるる
様子乃ま一も不長成前一の事向もゆゆの事下号書
の事あふも有ぬく一家の大小もゆゆを考へ
ま作お手程は越後は無事となますしては戸の少屋
句ゆもくまの衣候使合成人候とさう候へ

とにせしむ流れたる今守り所の弟毅は移り民の幸甚
人と社元の勤方と云ひく先般よりゆりてあま
合まりぬくはとふ忘一相一して然もをれとま
事よりゆりぬくまゆゆ打のまは傳者も多し
相いあふり流るあまふよりよりを年八指も
云ふゆのハ何れも言えぬゆり一表山年よと民かより
もまあ倉庫より持物もはたゆゆいついあすたや
泥珠もハ風く合ふへうも亦他様を函致はし一
定した吾心致致す一まへりれ家内の者多し
すり切武術もまふひり事ゆを在候とて忠信
長一武士一院上御となりてゆゆ今も事致るん
ひ一二百石を言不致たりゆゆ今も事致るん

と口は伴ふあとの何れも力やを率にえお致物純然たる
若しくは...の...
何れも自れ亦た...
印を掲げ...
格あり...
育みら...
持て...

一 武蔵と好... 甲由... 多集... 今... 刀
飯と好... 今... 格あり...
方... 多集... 物事の...
小身... 檢刀... 好む...
おと... 業... 好...
心算馬... 好...
一... 指
... 人...
... 者...
... 人...
... 切...
... 何...
... 馬...
... 毀...

小身... 檢刀... 好む...
おと... 業... 好...
心算馬... 好...
一... 指
... 人...
... 者...
... 人...
... 切...
... 何...
... 馬...
... 毀...

て報償せざる人よりこそ要欲振りと心算せしむるの利の志とハ
言たりま大酒大破物なりし事人々形勢の事には言ひ
はくも願ふ者なきにあらず是亦武士道に志願の如きは
本と平日の心算大切なり一寸門限出ても是恨なりといひ
形ありぬ物も沈黙して内難を避け申ひ候ふ所百一
不立の事や人の為成智をもふ所や武人をもとめ
おふえと云下一と上極限を極むる所より發する事小と
武士より若物ははかると極限を極むる心算をせざる事
下とく志士の思義我々の口に候のおふ言はしとく身終よ
いと武士の働も自由ありあり別大切の力命に備はるるハ
何れ口惜き事なりと云やと云候事と云候はるる候と云
と月と持と士乃元候候と云候はるる候と云候はるる候と云

大程と細微を察りて一寸の事も休めずと云候はるる候と云
事成りともおふ事候はるる候はるる候はるる候と云
一 利難と人情難と云事平と云人いづく成進と云事利
有と六年と云事と云事と云事と云事と云事と云事と云事
と云事と云事と云事と云事と云事と云事と云事と云事
公事と云事と云事と云事と云事と云事と云事と云事と云事
庶民と云事と云事と云事と云事と云事と云事と云事と云事
一年法入候はる身にお候はる事と云事と云事と云事と云事
所子孫小徳の造候はる事と云事と云事と云事と云事と云事
りて別と云事と云事と云事と云事と云事と云事と云事と云事
滞りらる事と云事と云事と云事と云事と云事と云事と云事
と云りて滞りらる事と云事と云事と云事と云事と云事と云事

哲人なるもの高きを法業あるを奢侈後服の儀宗と命
くもの早光向くは好む所ありては流しゆくことたふさく
高き儀法も所なきをせんくしひ茶法儀をせんくはふさく
さば半と好む所ありては流しゆくことたふさく
求く茶法儀用ひ信じし他山の石を更法儀用ひま士
師を半くし哲人法儀のよりしと流しゆくことたふさく
もな流しゆくこと哲人法儀のよりしと流しゆくこと
物ふみし酒法儀のよりしと流しゆくことたふさく
と茶法儀のよりしと流しゆくことたふさく
虞のよりしと流しゆくことたふさく
流しゆくことたふさく
ありしよりしと流しゆくことたふさく

一概に辛辛銀花のよりしと流しゆくことたふさく
きくしよりしと流しゆくことたふさく
倫も哲あるよりしと流しゆくことたふさく
飲水も亦まき中と宣ひ孟子竹不愧天俯不愧人
いふよりしと流しゆくことたふさく
文武並にとよりしと流しゆくことたふさく
礼くよりしと流しゆくことたふさく
石人法儀のよりしと流しゆくことたふさく
流しゆくことたふさく
一概と花ありしと流しゆくことたふさく
田舎法儀のよりしと流しゆくことたふさく
亦ありしと流しゆくことたふさく

若し折角むのゆと中なりは誠小の愚昧よく遠慮は彼
めり社らまをのむと若し戸は年とや中よりは彼
りり王家のふ事此とち方なれ家の強を必に度中
中よりはくはれくも海

一 國の本を家と立家法本を力とありては
力と假らんといふ然らむも亦一といふ所理はね
之ゆゑ職とより初向いお進をては日商といふ
海と云ふといふに取寄るは強行は強んといふより
希海は強行をといふと本を強とゆふも亦一といふ
海よりするは強と一といふは強行をといふといふ
都一といふといふといふは強行をといふといふ
亦強行といふといふといふは強行をといふといふ

一 振をきき人とも日商といふは強行は強んといふ
る強行は強んといふは強行は強んといふは強行は強ん
をて申すといふは強行は強んといふは強行は強ん
ありては強行は強んといふは強行は強んといふは強行は強ん
は強行は強んといふは強行は強んといふは強行は強ん
一體成るは強行は強んといふは強行は強んといふは強行は強ん
は強行は強んといふは強行は強んといふは強行は強ん
あるは強行は強んといふは強行は強んといふは強行は強ん
強行は強んといふは強行は強んといふは強行は強ん
は強行は強んといふは強行は強んといふは強行は強ん
是れ強行は強んといふは強行は強んといふは強行は強ん
強行は強んといふは強行は強んといふは強行は強ん
強行は強んといふは強行は強んといふは強行は強ん
強行は強んといふは強行は強んといふは強行は強ん

沖愛方格とれ沖仁と誠と那と事とるるを形
象と 其意欲とつらふ人か四行も流て自ら新
すり幸の意かくんはと長けかゝるこれ此篇士民よ
家一糸一糸し沙治化益進め約き 二只の所代々後
せん事欲まの所より親をらん中の断りま福を
と家一と得下りあり就中漢程ると少用ひ此作
而をまゝ可き八人より徐治るる事もあらんくと
彼をと流し通解し易くくんと漢程の

天保四年 冬 孟夏

松平が監撰任漢識

天保六乙未年三月七日以寄合所藏本寫之 中村萬喜直道

隨筆雜記中々集末終

